

大千世界樂屋探

初編 上
共三本

13
2835
1



2835
1

文化丁丑春發兌



大千世界
樂屋探
初編 人倫之部
式亭三馬戲編

大千世界樂屋探自序

飛虹傳の序不出すすも、康熙帝

子口伎あり日月の燈風雷乃鼓板

天地間一番戲場と云ふは、

大世界戲房やらんを有べし

と監るにモシ大奇あるぞ至く大目星の



癡呆と錫とある。戯房に復讐の脚色
有り。越王の恥辱。忍ぶる。樂室ふ會稽
子機巧有り。楊妃の戯房。上妓もあはれ
を無鹽の戯房に小町も有り。業平でも
王莽でも。孔明でも。辨慶でも。戯房の知
能ぬで持物。孔虫。虫の啼ぬで。お造。何あり

すや。天ふ。口。招。牌。子。虚。妄。あり。人。を
以。て。云。り。め。戯。房。と。看。て。明。び。清。貧。を
樂。む。と。ふ。壯。士。の。戯。房。は。金。が。欲。の。蠢。愚。情
那。り。濁。世。と。道。人。と。の。老。人。は。戯。場。は。余。が
欲。の。娯。樂。情。た。ま。ぐ。惜。心。欲。の。戯。房。の
門。首。是。より。二。齣。胸。を。聲。は。此。と。趣。向。の

端々我東側の柵に登り南園部

提子あつゆる限山川草木鳥獸虫魚森林羅

萬象擇採く何でも二十八万由旬仰て月

宮殿は屋上を採り俯く龍宮城の厦下

と穿つ地獄天堂春過てと秀句まがは

滑稽懐借稷雲ほぐるとの雨露霜雪有

情非情に至るまで余は漏さず戯房は

鑿金命て大千世界樂屋探といふ樂室

で聲をとり味噌きぬもさく欵のき散

してまの初編の稿就ぬ彼清女のつり

如く観るべき物を樂屋とおぼす看官は

賞を得く戯房落のまぎんを驚ふ時

文化十三年。丙子乃八月中浣江戸
（ろうごん）
 本町の小築欲心深慮小筆を採るも。
（せうちく）
 亦久々以物みあはせや。
（まことひま）

（しん）
 所謂金平杖の作者

式亭三馬戲題 

朱齋監庭林信書 

有情大干世界樂屋探標目
（ありけ）

乾坤之部
（けんけん）

- 春雨と白雨連牆乃闘詳
- 鶯と蛙が俳諧歌の會筵
- 雷公と地震乃力競
- 富士山と淺間山乃夜話

時候之部
（とき）

- 盆と正月乃昔話
- 元日と大晦日確失
- 宵と曉との寐物語

神祇之部
（かみ）

- 風神と痘鬼乃店卸
- 福神と窮鬼の靈驗
- 放屁神乃利生と得て疫病神敵と討り珍説

人倫之部

支體之部

○牛若辨慶五條橋の正説

○熊谷と敦盛と一谷組討の寔説

○安倍宗任梅花和歌乃事寔

○佐二本梶原守治川先陣乃正傳

○鴨越逆落義經乃胸中並雜兵の論

○佛前六波羅への推叅並祇王祇女嫉妬談

○臍乃獨語

○手と足の位争論

○腹と背後と九尺二間棟割住居の喧嘩

○本田天憲とでんぼう束髪と風俗と論ず

○鼻毛と白髭と青髭と身上話

○額の癭と陰れ痣と着衣爪紋の述懐

○文字入鹿子の總摸様と淺黄浴衣と黒羽二重乃盛衰記

並古着の後悔

附縹縷衣が懷舊

○異国張の蕨生物語

並典物漂流記

附黒縹子の帯紫縮緬の振袖が質屋流の身上談歎

○鬼太織が博多織小對して教訓

○五寸だるまれ服引と綿頭巾が口論

○摺箔の小袖と半襟衣装と見試

○晒乃手巾と革足袋との挑使

衣服之部

飲食之部

○ 靺鞨と雜巾が世帯咄
 ○ 河豚と鯰鱧が雪打
 ○ 酒子對て餅が直諫
 ○ 東埔塞と蕃南瓜と燉打
 ○ 大福餅。醴。田樂。風鈴蕎麥。鮎。鶏卵燒。天鼓羅
 の徒東西の橋詰小分て黨と結ぶ
 ○ 硯蓋乃慈姑と御簀身と觀て俊實僧都の古懐ふ
 ○ 和中散と西瓜。反魂丹と琉球芋の喧豚
 ○ 章魚和尚里芋が為小墮落す
 ○ 鮎。唐人と譚名と魚あり假小鱈と偽て妻の
 昆布と奪ふ

草木鳥獸之部

○ 豆腐。功小誇て蘿蔔と笑ふ
 ○ 水菓子總論
 ○ 松竹と槿花乃小田原相談
 ○ 勸學院乃雀蒙求と講む
 ○ 榭葉と蓮花と神佛問答
 ○ 蛇と蟻と蛙蛤魚足論
 ○ 古狸乃元頂同穴の狐貉と往時と語る
 ○ 班と面冠と白犬と塵塚小會と主と誇る
 ○ 鼠無謀の升蔭と嘲は
 ○ 金魚鉢の小魚炎暑に倦て古郷と想ふ
 ○ 盜猫妻戀猫と謀る

器財之部

○蠅。糲乃難と免けて再び灰に埋は

○桐乃箱枕と桐の下駄と兄弟の榮枯

○貧乏陶器巻樽と誓は

○伏見焼乃醜女と今戸焼の嬢子幸不幸と談す

○鬼瓦と統の烏が夕涼

雜之部

○地藏尊と閻魔王乃境論

○木佛と銅佛と石佛と信仰の有無と論じ

○一切諸精靈盂蘭盆會の迷懷

○見越入道遁世して昔と忍ぶ

○此目錄は漏たる趣向尚あまざり追て増補せんことを思ふに
掲出せる種々の趣向の長さと短さを一編より長きを一編より四五回

有情大千世界樂屋探標目終

と著し短き八十余回と一編とありて連年開鐫せし四方
賜顧乃君子發販と俟て求むる幸甚うん云爾

本文全部備筆 駒 知道
序文標目口繪書入 藍庭晋采

式亭 天女丸

江戸本町二丁目南側 式亭三馬店

月水不順と治す名方
くまのいせぬ妙藥
代 百廿四回

月くのけのそととてんむはさあぐの病とあるゆゑ
イやくこれを用ひて通しとせらるるが若くは久しきま
きりやくちのそととてんむはさあぐの病とあるゆゑ
子とてんむはさあぐの病とあるゆゑ
痛とあるゆゑの五三年の百のけのそととてんむはさあぐの病とあるゆゑ
どのひき病の人とてんむはさあぐの病とあるゆゑ
て行く年もくまのいせぬ妙藥とてんむはさあぐの病とあるゆゑ
とてんむはさあぐの病とあるゆゑ
くまのいせぬ妙藥とてんむはさあぐの病とあるゆゑ





有情 大千世界樂屋探初編卷之上

江戸戲作者 式亭三馬戲編

人物乃部

熊谷と敦盛と一谷組討の寔説

源平盛衰話の本文 修理太夫經盛の末子に無官太夫

敦盛の紺の錦の直垂に萌黄白の鎧に白星の冑

著て滋藤の弓に十八指の護田鳥の尾乃矢の鶴毛の

馬に乗給ひ唯一騎新中納言の乗給へ舟船を志して

右五張 一陽齋歌川豊國畫

一町計り遊せて。浮ね沈ね漂ひ給ふ云々

○三馬按さるる敦盛を平家の上臈狩よ初人をね不情も

ふくむもやどし好れもくる戦の場に就吟風鳴乃曲を

志く詩子管弦の息を信しおれも柔弱なる一門の

傳流く通夜酒室は羽立日なり病酔くて顔重く多可

青醒ゆきのほ氣いすご猶おめが如し當時なるが三馬
家製の金勢丸

法用あひまきふ六百年のいみ人されハ眠以眼を鯨波音お

と共一呼天なりう船命なりう時こゝろ窳さるるそらうりくと馬おまごう教素よりたぐけね

軍といひ所詮ヤンヤともいそね形勢なれが更上勝負を

好まると四つ明を俟つ嫖客のどく速く舟へと急ぐなる

どく容貌ハ口存の六波羅様よそ色生白く弱氣なる

ふり唐渡りの潘安仁京りの業平も斯やあ〜んと

思ふごらう江戸の使婦もを見肩ばうぬ男あり言語ハ

勿論京談の然ちやさうん鏡の著ざはるも将在束と

異りて意氣踏なれた体なるべし

敦盛ゆくり
ふみまきこいそり
「ヤレ」辛動めく。車とハ勝手が遠くて馬を

今軍備師昔大平記
今の軍備師昔大平記

祐経より始り近江八幡等小至るまで各戦国の勇士あり
勇士をさして武者といふ其武者の言語應對を正し
といふ。ひとこそと通音且。ちやの反。さ也武者言と。こそ
言と呼ぶ其説極めきううううと字義みよりて當極
の所他子所牽強附會の説をまうけて人を誑さんとする
予。今度と其手をたご先生勅もさし五音お通をりて
迹透を明多へと世得基をねらご拙くお下手の考体ゆ
ちび。いり五音ハお通するとも木曾反をばして。こそ反

ともいふやうに常暗の代の神樂の大鼓。どらくともいふ
。ごまくととも聴すと。一へん横纏は突崩さし先生
なまうへに敗軍せり。▲斯本文を瘞をて問詰あさびを
招くに似ると彼太平記讀を一條を講むる間く。京漢を
訂し古更を引き和漢暗合の更を演るみ齊しく
あむうく怒いあふべし。
備も直実沖の方を打え申。敦盛が体をえたるより
馬をさると入れ先祖代く傳来の日丸の陣扇も自ら

彩いろどり〜とおおややきき丹に色いろの日ひ丸まるなり。白しろ漆しの膠にかやまるまりけん。
 其その色いろをを形かたちどど黒くろくく黜くてて監かんるる。極ごく製せい朱しゆゆゆののわわららびび。
 朱しゆととんんええととり。○熊くま谷やひひここひひくくををここららるる。何なににに彼か所しよへへ馬ば。
 追おひひてて往いののとと已うららがが方ほうのの者ものぢぢややアア有ありり敵てき方ほうのの者ものぢぢ。
 大おほききままるる。ヤヤイイ。敵てきどどららううねね待まちちちややアアががれれ。トトままここハハテテナナ。トト考考へへ。
 夫それささ味あじ方ほうだだららむむ原はら價げよよ。アア呼よびびてて見みべべののトト大おほ音ね。
 ママイイ。ママイイ。其そこ色いろささ付いぐぐのの誰だれぞぞアアエエ。敵てき味あじ方ほう。敵てきどどららるる名な生せい。
 ココレレママイイ。ママイイ。平ひら家けのの大おほ將しやう後ごぢぢののいいひひ返かへささるる。敵てき小こ。

背後せうごににおおけるける云いふふのの人ひととと根ね性せい様さまへへけけららるる野や郎らうとと何なに曾そ。
 海うみのの方ほうへへ討うちち馬ば乗ま込こむむ。早あまま引ひ返かへささるる。ココレレ耳みみがが遠えん通つう。
 トト。其そのままははアア尿せ。ママイイ。聾そエエのの人ひとぢぢとと長なが可かトト馬ばをを。
 ○ココノノイイ。待まちろろ云いふふ。待まち延のびび。我われとと誰だれぞぞととおおりり。口くち度ど古こ又またとと。
 日本にっぽん第だい一いつのの剛ごう者もの。私わたくしのの旗はた。熊くま谷や次じ郎らう直ちか実み。
 直ちか実み云いふふ。汝な等らととああららむむ。延のびび。ママイイ。待まちろろ云いふふ。延のびび。
本文 斯く申まうささるる。日に本ほん第だい一いつのの剛ごう者もの。熊くま谷や次じ郎らう直ちか実み。
 云いふふ。敦あつ盛せい何なにとと思おもひひたたるる。馬うまのの鼻はなをを引ひ返かへすす。

渚へ向て游せり云云

數盛 可何ぢぢらけり濁音で松を招くかのツア源氏と

ええりい何やらさでぢら浪の音と鯨波音でトトトト

佐ア家世で船に乗るのものを。チヨツ是非及らん。

ト馬のまを海の方へ。何やらおもしろく

ト馬のまを海の方へ。何やらおもしろく

ト馬のまを海の方へ。何やらおもしろく

ト馬のまを海の方へ。何やらおもしろく

何のまぢぢらめア。雨曇とらめてぢらら。的らん

ぢらまめめら。の曇とらめて何はゆアわらどいみ

とらまめめら。教てまら。志し曇とらら。河原

の寝巻が一家でうららぞい。そんなら此方も

マイン。押飯野郎。宿ま。平家の音大持

あつての逢。平家の音大持。あやア。蛭生

蛭生。生陰。海流。葉。若草

鳥まへ珍
うんま
鳥まへ珍
うんま
鳥まへ珍
うんま
鳥まへ珍
うんま

真実^{まこと}の虚^{ちや}ぢやア秘^{あひま}東男^{とうなん}と汝^な京上^{きやうじやう}宿^{しゆく}ごら。
逃^{のがれ}るの秘^{あひま}早^{はや}やうは^は秘^{ひん}密^{みつ}講^{かう}教^{けう}の打^{うち}せれ。サア勝^{かち}
負^{まけ}へば。サア^ま戦^{いくさ}を打^{うち}始^{はじ}めろ。

秘文 馬^{うま}の足^{あし}立^た程^{ほど}に成^なるべし。弓^{ゆみ}矢^やを抛^なり捨て。太^お刀^た
を抜^ぬき。額^{ひたい}をあて。喚^よびて上^あり給^{たま}へ。熊^{くま}谷^や待^{まち}受^うて。上^あ
もつて。水^{みづ}鞠^{まり}と蹴^けさせ。馬^{うま}と馬^{うま}とを馳^かせ。並^{なら}び
取^と組^{ぐみ}。浪^{なみ}打^{うち}際^{ぎは}小^こ衝^つと落^おち。上^あり下^{くだ}り。二^に度^ど
三^{さん}度^どの轉^まり。けれども。大^お夫^との幼^こ若^わあり。熊^{くま}谷^やの古^{ふる}兵^{へい}

なり。けれが。遂^{つい}も上^あり。左^さ右^{ゆう}の膝^{ひざ}を以^もつ。胃^いの
袖^{そで}をひき。と押^おされ。大^お夫^と少^{せう}も働^{はたら}給^{たま}へ。熊^{くま}谷^やの腰^{こし}
の刀^{やいば}を抜^ぬ出^だす。既^{すで}に頸^{くび}を搔^かんとて。内^{うち}胃^いを見^みられ。十
五^ご六^{ろく}計^{けい}の若^わ上^{じやう}藤^{とう}。薄^{うす}化粧^{けしやう}に鉄^{てつ}漿^{じやう}黒^{くろ}あり。莞^{わん}尔^にと
咲^さて見^みえ給^{たま}へ。熊^{くま}谷^やの無^む慙^{ぜん}や。弓^{ゆみ}矢^や取^と身^みの何^{なに}
やらん。是^{こゝ}程^{ほど}若^わく嚴^{げん}き上^{じやう}臆^{おそ}ゆ。何^{なに}所^{ところ}小^こ刀^たの立^たへき
ごと。心^{こゝろ}弱^{じやく}ぞ思^{おも}ふ。云^い云^い
熊^{くま}谷^や。コレ。主^{しゆ}が名^なを何^{なに}と謂^いふ。何^{なに}でもハア。んぞ。所^{ところ}が。伊^い精^{せい}と云^い

棚の茄子なすこゝから小色こゝろの生なま白しろい人ひとが定めさだめし平家へいけぢやア。
お歴たふすのこゝろ小且こゝろ那夜なよぢやア。維い后ごの子息こゝろ名告なこつせぢやア。
サア。コシヤ。お歴たふ流りゅうさぬぢやア。この小且こゝろ那夜なよぢやア。肝きんが熱あつらア。改あらためサア。
早はや言ことせ入い云ことバ。コシヤ。コシヤ。肝きんが熱あつらア。改あらためサア。

本文 柳やなぎ誰たれの御おん子こを渡わたせ給たまふと問とひぬが。只ただ
疾はや切きとぞ宜よろしき云こと云こと

敦盛あつむねだんまり ● イヤ。其その根ねなこ云こと居いるぢやア。早はや首くび掻かき。
ササ大おほ事ことなる私わがもぢやア。とて屠と所との羊ひつぎ又また川かわ邊へへ

身み賣うへて懸かぢやア。のどろろ斬きる身みの上うへぢやア。さうい
能よう見み廻まわして居ゐるの。汝なが助たすけをよと云こと進すす注しゆなれ
るぢやア。能よう考かんてえんせ。須す磨まの肉にく裡らに焼やきて居ゐる
ナ能よう。其その火ひの中なかを沸わかく逃にげ。又また入い水みづも智ち恵ゑかゝる。我われ
が身み上うへといふ。悉しつ皆た焼やけ腐くらぢやア。阿あ房ぼうらゝん。
ササ痛いたうても大おほ事ことなるぢやア。早はや斬きてた。ハテ
能ようも能よう其その根ねは主しゆが情なさけ計はかり立ちぢやア。談だん合ごうといふ物ものぢやア
後のちと老人らうじんと悪わるいもの云こと後のち我われが細こいぢやア。主しゆが

統さまひつらつゝ中ちゆうらむど。吾われ程ほど斬きるて後あと入いれまが物の道どうり程ほどさ
小ちゆうさま見こ見まは灸まきりをまきまへいとなる所ところ。その小が見まめが不や定ままア
云いわくまがふんが踏あか。我が勝か氣きを搔か搔かてもまきまへるが供ま夫れも。
灸まきりごと合あ灸くして長ながく坐まられちやア。モノ不便あが堪まへい
ぢやアあんめへの何あがモノ批さん提ご宛うともへ思おもつても。十五じゆう提ご
おつたぞ。早あ退は放はなせうふ物ものごハサ切きり切きれり。
遊あり遊あり。お互あ調あを痛いたづ。主しが切きれとま後あに
切きらぬあそりゆへさ。タガ。そこがモノ。鬼おの眼まめも酸あね水み行ゆふ

血ちの泪なみだ落おち。松まつ露つゆと形かたちりやあよみむとらみ海うみぎわうもハア。
主しが首くびへ刀やちを差さし笑わら止とま万まんごてナ。けすめてんやんや
の中ちゆうへ首くびイ切きて打うち放はなす。あつたは。いふあもまきの毒どくごどしりぞ
各おの告とりしらん。已知知ら居いる通とり。東あ夷まで。あつたは。修しゆ令れい東あ夷
あもいつせ。今日こんにち名な告とり。あハ私わ堂だうの猶なほひでござれハ先ま鋒さき
の大お將しやうごびぎハ。頼たの朝あ権けん。だれ義ぎ経けい度たご。痛いたづのぞき。
さろや合あ戦せんといふ所ところを万まん一いつ。事こと實じつが先ままご。ごさ。ごさ。ごさ。ごさ。
別まち私わ堂だう。旗か頭とうの採たく式しきご。タカラあん何なにり下くだる男おとこでも

おごん後へ只今主が下司下指のよみかゝりて各告ても
後人ともあもをばらちやござうらねカラ松が志ちんごく
分を明とささ○ナアコレ○おらくと胸さ手並く。膝の下で
幼弁のなるくおん。コレ○り○コレ○り○とらうじま。まご
吾也後人うの。是やどににお談義説くさあ後人ちやア説法
はさうくござ。しうゆもこ。切と無絶景あるぜ。

本文 奉斬て雑人の中に棄置進歩人も便無く
侍り。憂ふしも知ぬ東國の庚。下臈に逢て名乗

まじと思召さう。夫も理に侍まども。存ずる旨
有て申と也と云。大夫思われ々ゆり。名乗たり
とも名乗さとも遁へば非ど。但存ずる旨とら。
勲功の賞を申さん為ふこそ有らめ。組も切さも
先世の契。讎をが恩よて報さるるり。然あらば名
乗らんと思。存ずる旨の有ならが聞さるるぞ云
●叢盛 汝がま行ふいそてちや行よ。何の徳さうぞん今名告
さうん。能聴。あのナア。私ナ。他界なすれと大政入道乎

清盛さうはのまふ。徳理大ま平経盛とらふ仁の。トツト
の末の子ちやりふま。▲徳谷ト。トびり。これより。清盛さうの
才の。小且那さうでござりや。ころ。あれが。終だんぶ。エと
あつと。案の定。遠行く。あけし。尻の。大ぶと。お憚ら。から。
大ハ。尻を。撒中ら。あむ。名で。ござり。中と。子。教。イ。や。く。め。の
さう。る。尻。で。か。ん。尾。終。の。男。ち。や。り。ふ。こ。し。徳。理。ち。や。り。ふ
の。ウ。其。経。盛。の。子。ち。や。り。ふ。が。ナ。ホ。ア。毎。官。ち。や。さ。う。の。無。友
大夫。敦。盛。と。い。つ。て。今。年。で。十。六。ち。や。り。ふ。の。▲無。へ。エ。蜜。柑
せむ

大夫。敦。ハ。テ。ろ。ろ。ん。耳。さ。蜜。柑。ち。や。る。の。無。官。ち。や。▲ハ。ク。ア。
無。官。で。ござ。り。や。ころ。終。て。ん。サ。甘。が。け。ア。ら。さ。じ。の。軍。の
中。で。白。粉。を。塗。る。ころ。の。鏝。お。お。は。け。の。優。長。ら。の。お
ち。や。り。く。あ。で。も。あ。ん。が。流。石。と。上。指。さ。は。ら。ご。女。子。の。根
ぶ。ー。ヤ。我。折。果。こ。ア。そ。ご。ご。と。借。早。さ。ん。悪。ん。お。名。ご。ご。
ト。考。へ。ラ。終。ご。く。父。の。ウ。ニ。ヤ。何。あ。の。お。爺。様。の。お。名。ご。と。ト。
ま。ん。尻。で。心。を。な。して。ト。ラ。それ。よ。篋。束。の。も。終。と。鹽。よ
教。そ。り。や。ア。何。を。い。つ。て。い。ハ。テ。常。々。は。ま。ま。云。あ。る。ご。ご。い。る。

●敦^{とん}ハチ^ち経^つ盛^{せい}の^のい^いこ^こり^りや^や母^{はは}生^{せい}能^{のう}い^いま^ま▲[▲]そ^そこ^こで^で小^こ且^ぢ好^{こう}結^{けつ}
の^のお^お名^なが^が。蜜^{みつ}柑^{かん}二^にッ^ッみ^み温^{ぬる}い^い蕎^{そば}麦^{まき}よ^よ●[●]ラ^ラ温^{ぬる}盛^{せい}ぢ^ぢや^やナ^ナ。コ^コリ^リヤ
能^{のう}い^いマ^マ又^{また}蜜^{みつ}柑^{かん}二^にッ^ッと^とら^らぢ^ぢう^うた^たら^らや^やナ^ナ▲[▲]ハ^ハテ^テさ^さく^く
三^{さん}人^{にん}が^が二^にッ^ッぢ^ぢう^う六^む人^{にん}ち^ちう^うふ^ふ幼^{えい}定^{ぢやう}で^であ^あら^らる^る●[●]マ^マコ^コリ^リヤ^ヤあ^あら^らる^るい^い。
サ^サア^アく^く早^{はや}討^{うち}ん^んせ^せ。十^{じゅう}六^{ろく}ま^まで^で活^{くわ}き^きり^りや^や丈^{ぢやう}丈^{ぢやう}う^うぬ^ぬ。
【本文】生^{せい}年^{ねん}十^{じゅう}六^{ろく}に^に成^なる^ると^と宣^{のたま}け^けり^り。熊^{くま}谷^や泪^{なみだ}ぢ^ぢう^う
ち^ちら^らと^と流^{なが}し^しけ^けり^り。あ^あら^ら心^{こころ}憂^{うれ}の^の御^{おん}丈^{ぢやう}や^や。さ^さて^て小^こ次^じ郎^{らう}
と^と同^{どう}年^{ねん}よ^よや^や。實^{まこと}よ^よ左^さ程^{ほど}と^と御^{おん}座^ざら^らん^ん云^い云^い

▲[▲]ハ^ハア^ア十^{じゅう}六^{ろく}の^のや^やお^おな^なり^りの^のま^まり^りの^のや^やと^と。お^おや^やら^らる^る大^{だい}十^{じゅう}六^{ろく}ぢ^ぢう^うと^と
年^{ねん}強^{つよ}ぶ^ぶん^んべ^べぬ^ぬ。私^{わたくし}が^が息^{いき}あ^あが^が丁^{てい}ど^ど同^{どう}年^{ねん}で^でこ^こぢ^ぢう^うて^て名^なを^をお
小^こ次^じ郎^{らう}直^{ちき}家^けと^とや^や申^{まを}す^す。今^{いま}朝^{あした}も^も早^{はや}。已^いと^と同^{どう}志^し。城^{しろ}門^{かど}は
先^ま筧^{かき}さ^さの^のま^まり^りた^たが^が十^{じゅう}分^{ぶん}働^{はたら}こ^こ上^うふ^ふ。モ^モノ^ノ。小^こ臂^{うで}へ^へ粘^ねり^りを
負^おこ^こら^らし^しと^と懇^{こん}す^す。何^{なん}早^{はや}お^おや^やら^らる^るま^まり^りと^と競^{きやう}や^やら^らる^るや^や。
三^{さん}葉^はの^の汁^{じゆ}牙^がお^お見^めゆ^ゆを^を儲^{たくわ}む^む。か^から^らし^しを^を通^{とほ}り^り。燒^や野^のの
雉^き子^こ。昼^{ひる}の^の夜^よ鷹^{たか}子^こを^をち^ちら^らぬ^ぬ者^{もの}と^とこ^こぢ^ぢう^うは^はし^し移^{うつ}る^る子^こ乃^の
悲^{かな}し^しと^と誰^{たれ}で^でも^も早^{はや}。同^{どう}じ^じこ^こと^とさ^さら^らに^に中^{ちゆう}の^のも^も。傍^{かた}で^で見^みえ^える^るぢ^ぢう^う

目もろくもあつて鼻筋のりとたがふ。何れも彼も
尋常ゆ採りて。天人の嬰童をみるやうな人ど物だ。
はあ、腕をぬき、目中へ入れさうして、えづくもあつら
あかのつらき、えんをく、あつら、付取さだま、あめ入さまの
ゆ支取を何と為さる。マレ、今其根付根をゆ弁あつらと。
涙と涙あめが、出やぶつて、左も右も堪られと物だ。
移人、早助もまてい、あめ入さまのゆん底と実、今我折
果つて、まら他の夏でもごん移へが。日本、唯一の剛者と

名を告ぐけして、追鬼、うらよ。落武者の癖、う手弱の癖、あさ
怖ともあ移へて、響をうらうとく、写して馬をざんがり
くと追飯とら、イヤ、ヤ、たは、ゆ、此軍あると、あめ
中での大将、及でござは、イヤ、るん、のりよ、今日、の日天、あめ
かけて、虚ハ云移人、現まら、軍止、る法もあれ、命、ああ助
やとて、あざがる。

【本文】是は公軍、あり、あま惜、やらし、せんと思、煩、ひて。
暫押、えて、案、なるふ、前、あも、後、もも、組、て、落、思、ひ

思ひ分捕りたる間に熊谷こそ一谷まで現れ組
し敵を討つて人を取られりと云れん事の子孫も
傳て弓矢の名を折へしと思返して申するの世も
助進せむやと存侍れども源氏陸に充滿より云

中めり氣の強き使の軍兵トイ次郎公埒のめり孫へコウ
何をとらみてきむんと打斬て去りし我氣が弱ん
苦ぢやア孫へが先刻くらから果つて孫へ人の
中へさしこむ中めり孫へを後孫へとんごせ

○又一へきのさうめきる軍兵コウ直実子とてエシ
足下でもござんとあへ子不佞先刻くら足下と見ト天皇
大き小倦の田のあきれとあぢやアせむん諸事菫痒の
く菫痒の心うちとけてうらぐとさうぬ五大力さるる
大きく山澤屋ごモシちよびと見トあがスまげ馬の上で
組やとよりエソ西馬がア人どんと落のこよりうこま
是非紋切形がナ組で落るといふが山ささるる落さ
西でよまなり下になり一すしたまのあやせう是れ

よき。トド足下と古兵の犬先生下ふりよめとて糸
 返の上よる。取て押への首ちりりまり。社ぢやア後へ
 モシどろどろせんと。ト藪色ある声よて暮れ
 直実夜。そゝと怒谷の次郎とも有りとるもの
 其の狼狽云ふが有り。何為斬ん。早う討り
 直実夜。おれどもなへ怒ち討る。との弱くなく
 塵ア移へぞ。早く坐付てふら。出刃庖丁の俠者の
 魂行光と雑兵の魂と。とろろりと坐てたりや。彼奴

とむ。いの美童ぢやけ。怒谷も打込つ。大音は日
 ぞうらん。吾侪其根に存る居て。軍とも出づること
 わらう。長吏妨。溝田甫へ打込。又声を彼根人
 云。ものどろとる。ふもあさん。べらむ。とん
 りきぬ。よぬくの靉玉へらむ。れの岡山。むら人の
 本家。まぎれぬのぞん。とられやん。西の兵。是く打込ん
 其根。よぞろ。らんとん。馬の耳。むに風を
 請。やうな物。いぬの。變童。どもに食込。居る。け

下へは
 西國
 梅子
 西國
 梅子

のきんむん。のきんむん。の軍兵「コウ」公連と舟暮老
がせ。物るの太目おえらとさ。寤ちつと灰水が抜まがら。
さうも俗物足も美平ごよ。ありやアリ。生捕く串
童よ賣るといふ惡法ぢやア秘入り。それごと大欲ぢりの
只の親仁で。おろきおひ足浪おきくごんアイさやうらうらだ。
ととも欲心を捨るまら婦人よさる。ト沖の方ヲヤレ。
婦とらんが向の船をええ入。平家の軍船とけ婦おひ
がせ。一面よ美ん。とく真中に松扇を。ト口の更へ出て

あつちをええとてゆるののヤンヤがせ。他一はがたまのうら
松扇でほぎとやう。アとく。私おろくゆをら出とてゆる特造
やめつらうけく。奇く妙くおそる。おの子が一歩おほい
懐く。おのおおとまら討死も厭り移るぞ。ア分捕高名
仕りたらナドトく。この娘。娘もは後後ぞ
おれよりや傍の中半務。男おのさる風でオ一見生の
利く面ぶ。おの内を二三投連てオオ入。惜いおを平家お
金せ。的扇色の玉虫さる。おのとも一矢放て入。

○按（規）どはよ（何）系（系）結（結）扇（扇）の（の）的（的）を（を）檀（檀）比（比）浦（浦）の（の）戦（戦）ひ（ひ）な（な）れ（れ）が
是（是）より（より）後（後）の（の）事（事）なる（なる）も（も）も（も）決（決）ら（ら）不（不）定（定）と（と）言（言）未（未）爾（爾）後（後）
家（家）守（守）る（る）結（結）術（術）の（の）り（り）も（も）後（後）人（人）巨（巨）く（く）考（考）索（索）の（の）は（は）べ（べ）し。

トキ二次郎公とまじり「コ」がうらむ。それで日本一
の「へ」黍（黍）固（固）粉（粉）が噴（噴）鼻（鼻）と「別者」の「香」の
物（物）も（も）古（古）い（い）糠（糠）漬（漬）の（の）茄子（茄子）と「只志」が「侍」でぬくと
切（切）て（て）蓋（蓋）物（物）へ（へ）入（入）れ（れ）て（て）茶（茶）を（を）う（う）貫（貫）ふ（ふ）中（中）の（の）さ（さ）も（も）娼（娼）妓（妓）と
新（新）と（と）二（二）人（人）の（の）も（も）樂（樂）と「洒落」ぢやア福入の
慈（慈）谷（谷）と（と）る（る）も（も）この
口（口）は（は）ま（ま）き（き）よ（よ）の（の）り

敷（敷）盛（盛）は
打（打）む（む）ら（ら）い（い）の（の）通（通）り（り）の（の）惡（惡）と（と）い（い）う（う）も（も）早（早）大（大）勝（勝）の（の）軍（軍）兵（兵）が（が）駈（駈）お（お）る
中（中）で（で）ど（ど）ぎ（ぎ）ら（ら）ら（ら）拙（拙）者（者）が（が）お（お）助（助）や（や）こ（こ）所（所）が（が）放（放）艘（艘）舞（舞）を（を）あ（あ）る（る）中（中）に（に）
物（物）で（で）他（他）人（人）が（が）又（又）擡（擡）ぐ（ぐ）い（い）ま（ま）づ（づ）ら（ら）ハ（ハ）だ（だ）め（め）さ（さ）る（る）も（も）ど（ど）ハ（ハ）何（何）と（と）い（い）ふ（ふ）。
中（中）も（も）早（早）逃（逃）る（る）中（中）の（の）孫（孫）く（く）ら（ら）。是（是）期（期）を（を）さ（さ）ら（ら）せ（せ）さ（さ）。其（其）代（代）は（は）お（お）あ（あ）る（る）。
さ（さ）ぬ（ぬ）の（の）菩（菩）提（提）を（を）吊（吊）す（す）と（と）い（い）ふ（ふ）。サ（サ）ア（ア）。是（是）期（期）の（の）能（能）う（う）と（と）い（い）ふ（ふ）。
か（か）と（と）う（う）。あ（あ）ん（ん）ま（ま）ま（ま）と（と）い（い）ふ（ふ）。

【本文】迎（迎）も（も）遁（遁）給（給）ふ（ふ）き（き）御（御）身（身）な（な）ら（ら）ば（ば）。御（御）菩（菩）提（提）を（を）直（直）實（實）
能（能）く（く）訪（訪）ひ（ひ）奉（奉）は（は）べ（べ）し。草（草）の（の）陰（陰）を（を）御（御）覽（覽）せ（せ）よ（よ）。疎（疎）畧（畧）

努力候まどとして。目と塞き。齒を啗合せて。涙が
流し。其首を搔落と。無慙とらも愚なり。敦盛
死を恐れ心を降さど。幼齡の人さりととも。頗
庸の類。非ざりけり。平家の入ぐら。今討れ給近も
情を捨給りど。此殿軍の陳あても。隙の吹人思
ろにこそ。色あつりき漢竹の笛を。香もあつり
錦の袋よ入て。鎧の引合よ指さつり。熊谷是を
見奉り云云

▲軍を為る小笛を拵て出。イヤハヤあつりて。道は
竹夜笛を吹中。太鼓を打から。びりくんと
駭きりけが。吾々又平家の陣で。討死の引導す
あつり軍にすて。驕りりのを。へん久しうど。の善ど。

本文 最欲や此程も。城中に此曉も物の音れ聞つる
此人あて御座なり。源氏の軍兵の東国より。數萬騎上
たれ共。笛吹者の一人もな。如何あねが平家の公達
加様よ優に御座らんとて。涙を流て立りらる。彼

笛ふえと申まうさるるの父ちち經つとむ盛さか笛ふえの上手うまにて御おん坐まるるが砂すな金かね
 百ひゃく兩りゆう宋そう朝ちゆうは渡わたされて能よき漢かん竹ちくを二に枝えだ取とり寄よせ。殊ことは能よき
 兩りゆう節せつの間まを一ひと節せつ取とり。天台てんたい座ざ主しゆ前ぜん明めい雲うん僧そう正しやうに仰おほせ
 られて。秘ひ密みつ瑜いう伽が壇だんお立たて。七しち日にち加か持ぢして秘ひ藏ざうして彫おほ
 らるるじじ笛ふえのの子こ息そく連れんの中ちゆうにに。敦あつ盛さか器き量りやうの仁にん
 なるるとて。七しち歳さいの時ときより傳つたへ持もたれるけり。夜よ深ふかる儘ままお
 さえさええが。小せう枝えだと号なづけらるる云いくく云いく

有情じゆうじやう 大千世界樂屋探初編卷之上畢
 非情ひじやう

旧
 2132
 143-145

